

子ども子育て会議 幼保連携検討部会 について

架け橋プログラムについては、令和7年9月に連携校区を決定し、10月より保育・授業参観の案内をし、相互参観を始めた。そして、令和8年4月より、架け橋プログラムを25校区で本格実施していく予定である。

その際、各学校園でどのように連携を進めていくのか、見通しをもてるように架け橋プログラム骨子例を提示し、取り組む内容の大枠を示す。令和8年度は、フェーズ1の内容について取り組み、令和9年度以降フェーズ2に進んでいく予定である。

骨子例(案)については、有識者以外の幼保連携検討部会委員で11月と1月にワーキング会議を開催し、内容について話し合った。

令和7年11月21日(金)第1回ワーキング会議○架け橋プログラム骨子例(案)検討

(意見)

- ・多様性として日本語指導を要する子どもたちへの配慮を入れてほしい
- ・幼児教育で培われたことを理解した上でスタートカリキュラムを作成・始めるべきである。
- ・私立園より各中学校区ブロックで骨子例を作るのは不安⇒共有できる場の設定を希望する。

令和8年1月13日(火)第2回ワーキング会議○架け橋プログラム骨子例(案)訂正版→資料1-1 資料1-2

- ・特別支援や多様性としての日本語指導を要する子どもたちへの配慮も含めた形で示す  
→外国籍の子どもが多い校区では、中学校区に応じたものを入れていく。
- ・スタートカリキュラムについて開始する時期をずらしました。
- ・フェーズ2に幼児期の育ちや学びをより意識し工夫したスタートカリキュラムの作成、フェーズ3に安心と自己発揮できるスタートカリキュラムの実施と示す。

○令和7年度連携状況調査票の結果について →資料2○令和8年度架け橋プログラムの進め方について→資料3 資料4の提案

(意見)

- ・架け橋担当者連絡会に出るのは誰なのかを提示してほしい。  
私立園は、5歳児担任は、年々変わっていく。全体的に把握をしている主任・主席クラスの出席をさせたい。
- ・校区の特徴を客観視するためにも、第三者の介入、例えば、架け橋を取りしきるコーディネーターが必要でないか(校長・現場の先生以外) →小学校に負担が大きいのではないか  
→モデル地域は、連携の仕方を伝えていくのがベストではないか
- ・中学校区で子どもの実態を通して共通の話題を見つけ、交流する→めざす子ども像を共有しそこに向かう保育や子どもへ関わりを具体化していく。  
小学校と情報を共有する中で指導のずれを把握する(例えば、トイレ指導等)  
初めは、皆で話し合いやすい話題から話を始めていくと良いのではないか。
- ・地域の課題があきらかになっているのであれば、中学校区つきたい力等の資料がほしい。

## 【子ども子育て会議 幼保連携検討部会 資料】

### ・資料1-1 東大阪市架け橋プログラム骨子案(例)

### ・資料1-2 東大阪市架け橋プログラム骨子

(運用方法)

令和8年度4・5月頃に「第1回架け橋担当者連絡会を開き、公立・私立の全学校園の職員1名が出席→資料1-1架け橋骨子例(案)を示し、学校園に周知・理解を深める。

令和8年度は全学校園でフェーズ1から始める。連絡会の中で、資料1-2を示し、中学校区で具体的に進めていく方法について説明を聞き、担当者が学校園に持ち帰り、各中学校区の窓口連携担当者会議で、フェーズ1についての具体的な取組内容を検討する。

### ・資料2 連携状況調査票(令和7年12月23日に学校園に発信)

調査項目は、要旨の通り。回答状況(1月26日現在)小学校51校中49校、公立園17園中17園、私立幼稚園協会所属の園は21園中16園、私立保育会に所属の園は58園中19園

回答

【相互参観を通して、新たな発見したことや良かったこと】

- ・保育の考え方や仕組み、子どもの接し方や行動の捉え方がわかった。
- ・児童が主体的になって取り組んだり、ICT 機器を利用して授業を進めたりしていることが印象的であった。

【参観実施に関する課題や連携をする上で困っていること】

参観の在り方やスケジュール調整の仕方、連携の取り方、相互参観の仕方、管理職から教職員へのアプローチの仕方について困り感をもっている意見が出た。小学校と園の縦の連携だけでなく、小学校と小学校、園と園の横の連携についても、実践を深めたいという意見もあった。

令和8年度は、モデル地域(英田中学校区)を作り、先行実施の中で上記の困り感に対する好事例について、発信をする予定である。

また、事務局主催の架け橋担当者連絡会を通して、架け橋プログラムの骨子例(案)や架け橋プログラムの理解を深めていく予定である

### ・資料3 架け橋プログラム事業実施にあたって体制作り(案)

令和7年度は、ワーキング会議を通して、主に次年度の方向性を検討した。

令和8年度は、幼保こ小連携担当者を各学校園から一人選出し、事務局主催の幼保こ小架け橋担当者連絡会に出席し、中学校区の取り組みや市内全域の進捗状況等の情報交流や好事例の共有をする。中学校区では、世話役校が「窓口校が集まる日程」を調整し、窓口連携推進会議を開催する。

令和8年度については、モデル校区を設置し取り組みの様子を他の校区へ情報提供する。モデル校区は、相互参観や探究学習等が進み、公立と私立が連携をしやすい英田中学校区に依頼をした。

**・資料4 令和8年度 幼保こ小架け橋担当者連絡会について(案)**

年間 3 回開催予定をしている。内容については、第1回は架け橋プログラムを設定するにあたってとし、連携担当者に向けて、事務局から骨子例(案)の説明や校区における会議の持ち方や顔合わせの仕方等具体的に示す。第2回は、授業・保育参観の進め方について、保育の見方や授業参観の仕方を知らせ、オンデマンドで配信をする。第3回は、事例発表と次年度の取組についてとし、モデル地域の好事例の取組等を報告し、次年度の方向性について確認をする予定である。また、東大阪市教育センターの幼小接続研修を案内し、講師を招聘し、架け橋プログラムについて講話を聞き、理解を深めて機会を作っていく予定である。

**・資料5 東大阪市中学校区ブロック「めざすこども像」について**

現在、25 校区では、校区の園児・児童・生徒の実態に応じて、めざすこども像を設定している。これは、一定の期間を経て、見直しを図っている。このめざすこども像をもとにつけたい力を設定し、その力が育まれるように様々な保育・教育活動を展開している。今回、架け橋プログラムを本格実施するにあたり、話し合いの材料として示したものである。